こんにちは、図書館です！～先生インタビュー～

人文社会科学部
教授
原　克昭

愛知県生まれ。専門は、日本倫理思想史。主に日本の宗教文化や神話の変容について研究している。

――先生は日本倫理思想史がご専門ですが、学生時代はどのように図書館を利用されていましたか？

まだパソコンもケータイも持たない90年代初頭の大学生にとって、図書館は唯一無二の情報源でした。私が在学していた私立大学図書館は研究書・雑誌紀要から新書・文庫・文芸書にいたるまで揃えていたので、ヒマさえあれば図書館で借り出しては青空ラウンジで読み耽っていました。おかげで“読書灼け”になったくらいです。卒業論文を控えた頃には明治・大正期に遡る古い雑誌論文を捜し自分なりの「研究史」を構築することに奔走しました。現代では論文データベースも充実し、リポジトリやWEB公開された学術論文が多勢を占めていますが、当時はとにかく手ずから論文を捜しだすことが使命でしたので、新旧図書を兼ね備えた情報の宝庫としての図書館は欠かせない存在でした。

――専門以外ではどのようなジャンルの本をお読みになりますか。

もとより日本倫理思想史という分野は、確固とした文献資料や方法論が規定されているわけではありません。むしろ、時代縦断・ジャンル横断しながら、日本のありかたを多角的かつ輻輳的に探究することを主眼とします。したがって、研究する上でも、日本史・古典・文学・芸術史・民俗学など隣接諸分野の文献も渉猟する必要があります。100人いれば100のテーマが存在するといわれるように、「○○思想史」と銘打つ図書（たとえば『日本遊戯思想史』『日本災害思想史』など）もあまた公刊されています。個人的には日本中近世の宗教文芸思想や神話の思想史を専門としていますが、人文領域に限らず少しでも興味をひいた本は、ひとまずめくってみるように心懸けています。

――先生にとって「読書」とはどんな意義を持っていますか。

世にいう団塊ジュニア世代の真っ直中で生まれ育った私が、何かに「ハマる」経験は高校時代まで皆無に等しかったと思います。そんな「ノンポリ」で凡庸な「サイレント・マジョリティー」だった私が「ハマる」醍醐味を味わったのは、バブルの余韻が仄かに漂う大学進学後のこと。ふと手にした文庫本『ノルウェイの森』――そこはかとなく時代錯誤的な親近感を覚えたことを契機に、あらゆる作品群を読み漁り一介のハルキストへと成りあがりました。1Kアパートでひたすら原稿用紙にお気に入りフレーズを書き溜めては表現を真似たりした記憶があります。何のためでも誰のためでもない非実効的な「読書」の営為は、さらに“青春のはしか”こと太宰治、そして“未解決事件”筆頭の三億円事件探究へと（おそらく余所からは理解されがたい）脈絡を保ちながら拡大再生産されてゆきました。とりとめもなく「ハマる」ことが、何かのためと実効目的化したとき、その醍醐味は俄かに解消してしまうのかもしれません。

では、「ハマる」素因とは何か。そこに「文字」があり「物語」があり「文学」があるからでしょう。ともあれ実効性を追究する科学研究とは対照的に、文芸思想研究が永遠の陰画テーマとして屹立しつづけることを願ってやみません。

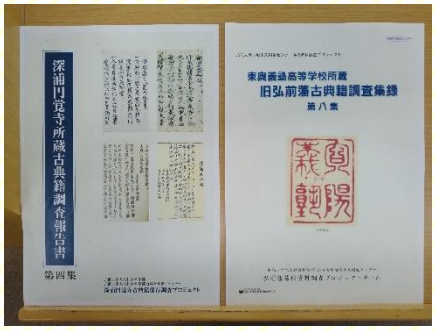
――学生さんへ図書館の活用方法についてアドバイスをいただけますか。

目当ての図書を捜す際、今はオンライン検索で所在を捜し当てることができますが、開架されている図書館では、ついでにその前後に配架されている関連図書にも触れることで、思いがけない重要な図書との邂逅を果たすことがあります。その点、弘前大学附属図書館も開架仕様ですので、開架であることを最大限に活用してもらいたいと思います。

――最後に弘前大学附属図書館に一言

弘前大学に赴任したことで旧弘前藩校や深浦円覚寺など津軽の地域資料や古典籍を調査する機会が多くあります。この資料が伝わる地域はかつてどんな場所だったのか、この文献を著した者はどんな人物だったのか。そんなとき頼りになるのも附属図書館です。地域に関する情報を収集する際には、青森に関する書籍はもとより、集密Aの郷土図書コーナーには地域資料が集約されており、まさしく地域の情報センターとして活用しています。

（聞き手：広報委員　佐々木）



編集に携わった図書
- **深浦円覚寺所蔵古典籍調査報告書・第四集**
- **東奥義塾高等学校所蔵旧弘前藩古典籍調査集録・第八集**